

INTERVIEW

公益社団法人地域医療振興協会 常務理事
東京ベイ・浦安市川医療センター 副管理者
木下順二 先生



このコロナ禍を 新しい医療の形のステップに。

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

趣味のお陰？で自治医大に入学

山田隆司(聞き手) 今日(4月14日)は火曜日です。新型コロナウイルス感染拡大の厳しい状況の中ですが、地域医療振興協会の常務理事として、また現在は協会本部の新型コロナウイルス感染症対策本部長などいろいろな役割を担っていただいている木下順二先生のお話を伺うことになりました。よろしくお願いします。

まず、先生が自治医科大学を卒業して今に至るまでの経歴を紹介していただけますか。

木下順二 私は昭和39年生まれで自治医科大学には昭和58年入学で12期になります。同期ではこのインタビュー記事に大分県姫島診療所の三浦源太先生、女川町地域医療センターの齋藤充先生、名田庄診療所の中村伸一先生が登場しています

が、その他にも協会内外で長く地域で活躍している先生が多くいらっしゃいます。われわれの学年は、東北新幹線が昭和57年6月に開通して、自治医大キャンパスの横を走り始めた直後に入学試験があったのです。そのためか英語の二次試験の論文のタイトルがことあるうちに「東北新幹線」でした。そのおかげか12期は鉄ちゃん(鉄道ファン)が多く鉄道同好会の部員が10名以上いて、国鉄全線完乗したのも私を含めて4人だったか居ました(笑)。鉄ちゃんなので基本的にローカル線など田舎に行くことが大好きで移動を苦にしない。へき地医療と親和性が高いと思いますが、一箇所に長く居ることはあまり得意では無いようです。

私は医者になることを強く希望していたわけではありませんでした。高校3年に上がるときにパソコンのプログラミングを覚えたことから病みつきになり、夏にはゲームのプログラムコンテストに応募しようと思ってパソコンショップの展示機を使わせていただき一所懸命作っていました。そんなわけでコンピュータの世界に身を投じようかと思っていたのですが、学費のからない大学ということに魅力があって、自治医大を受けたところ、先述の入試のいたずらで合格したため、成り行き任せな感じで入学しました。

在学中は心療内科や眼科などにも興味がありましたし、細かな領域の診察は割と好きでしたので、自治医大を卒業して平成元年から静岡県立総合病院で2年間初期研修をした際には眼科

が一番長く、合計3ヵ月半ぐらい研修しました。耳鼻科も回りましたので、今でも診療所に眼や耳の病気の人が来ても「診てもいいんだ」という気持ちで対応できます。3年目からは焼津市立総合病院という地域中核の600床の病院で、3年間内科系のローテーションの研修をしました。6年目からは地域に行くことが分かっていたから、最後の1年は9ヵ月消化器、2ヵ月循環器をまわり、内視鏡関係の手技については上部、下部、ERCPを単独でできるところまで仕込んでいただきました。

そして私が医師5年目になるころに国立湊病院の委譲の話が出て、吉新通康理事長が副院長として赴任し、平成5年度から静岡県の自治医大卒業生は大体2ヵ月交代で湊病院に派遣されました。

共立湊病院のこと

山田 委譲の前の国立病院時代ですね。

木下 そうです。私は5年目の後期研修の予定を1ヵ月早く切り上げて、平成6年3月に国立湊病院に赴任しました。すぐにも委譲という話だったのですが、実際には3年半かかりました。当時は小池宏明先生が副院長で、私も含め内科医は4人、その6月に小池先生と交代して小田和弘先生が赴任されました。

山田 国立病院委譲の第1号ですが、3年半もかかったのですね。その間先生は国家公務員だったわけですね。

木下 そうです、厚生技官です。赤字病院ということで予算がおりず設備更新がされていない。一番びっくりしたのは、内視鏡の光源が暗くて胃の中を見ても胃の壁がうっすらと見えるだけ(笑)。細菌培養用のインキュベーターは昭和36

年くらいに製造されたもので、木製のキャビネットで骨董品のようでした。医療機器の代用品をホームセンターで探してくるような状況でした(笑)。

山田 (笑)。

共立湊病院が始まったのは何年ですか。

木下 平成9年10月1日です。土地、建物は国から無償譲渡を受け、県の補助で医療機器を整備してスタートしました。

山田 国立病院から共立病院に変わったことで変化はありましたか。

木下 以前が酷かったようで、先述のように医療設備は古かったし、「あの病院は救急車じゃないと診てくれない」ということで、病院の目の前にある民宿が救急車を呼んで「病院に搬送をお願いします」と言ったという逸話もあったようです。わ